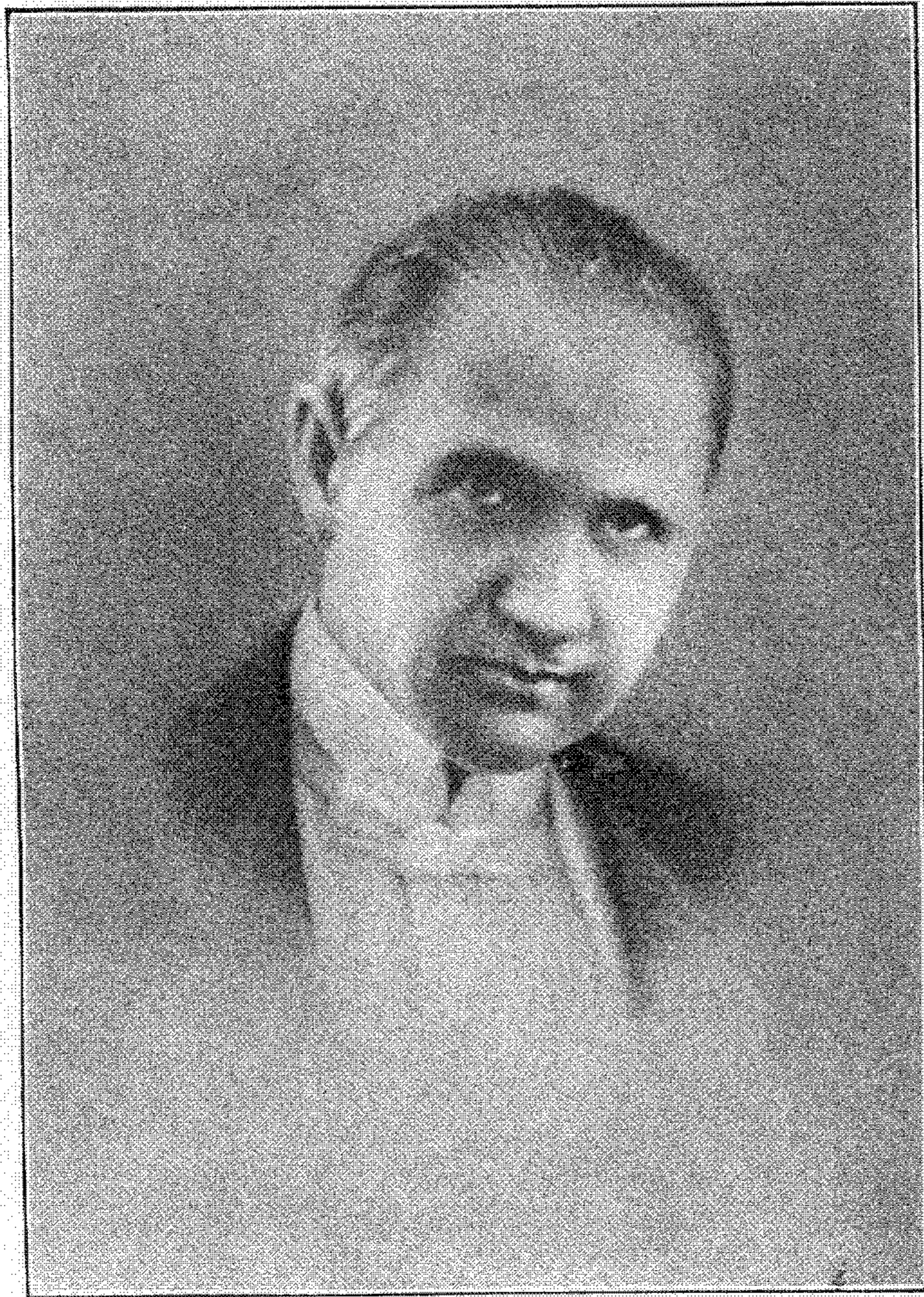


マイロン・ホービット<sup>ホ</sup>クラブ<sup>ホ</sup>ボード

Myron A. Bickford



### ピツクフォードについて

マイロン・エト・ピツクフォードは米國に於けるプレクトラム樂器研究家である。

數年前、閨秀ギタリスト、オルコット嬢と結婚して以來、共に作曲し、共に演奏壇上に立つて居るが、惜しい哉、彼の藝術家としての性格はあまりに世俗的であつて、世のプレクトラム研究家に師表として仰がるゝに到らない。吾々は彼が眞に崇高なる感情を以て今後の道を歩む事を望むものである。

## マンドリンテクニック上に於ける正確 にして迅速なる演奏の熟達に就いて

此表題に興味を有つ多くの人の中でも其中に用ひられた「正確」と云ふ言葉は蛇足であると考へる人があるであらう。然し速く弾くと云ふ事は左程困難ではないが正確な、鮮かな、あぶなげのないテクニックを自分のものにするると云ふ事は容易くないと云ふ事を私は諸君に示したい。それと同時に右の二つの技能を獲取する爲に必要な左右両手のテクニックを發達せしめる方法を明にしたい。

右の技能の熟達を計る爲には種々の點に注意しなければならない。即ち樂器の持ち方が正しくなければならぬ。又ピック、手、手首、腕及び左手の指も適當の位置に置かれねばならない、そして此等の一見瑣細な様な諸點が充分に注意せられなければ全き發達を遂げる事は不可能である。勿論私が今説かうとする方法が唯一、

不易のものであると云はうとは思はない。又茲に説く理論又は實驗の一つのみが唯一の理論又は實驗であると云ふのではないと云ふ事にも注意してもらひたい。然し此等の方法は總て私自身の彈奏或は教授に於てのみならず此樂器の獨奏者として有名なる人々、及び多くの教師達によつて實際に實驗せられたものである。もし他の方法によつて同じ結果を得る人があつても、それは決してこゝに説く理論の價値を損ずる事とはならない、同時に此方法を充分研究する時は常に實用的であるのみならず最簡單な最も容易な方法である事が明になるであらうと信ずる。

第一に注意しなければならないのは両手が全く自由に使ひ得る様な位置にマンドリンを持つ事である。何となれば孰れかの手でも腕でも少しでも自由を缺く時は最もよき結果を得る事は不可能であるからである。元來マンドリンを奏する場合に二つある。即ち立つて奏する場合と座つて奏する場合とである。そして何れも格別差異はないが立つ場合即ち下腹部の下にマンドリンを置く場合より寧ろ座つて奏する

場合、即ち膝の上右の腿の上に置くのを普通とする。何れの場合に於ても楽器の首は出来る丈垂直にせなければならぬが器體は稍前方に傾けてもよい。かくすれば奏者が僅に體を傾ければG線を見る事が出来る、初學者は總ての線が見えなければ全く彈奏が出来ないと考へる事が多い。けれ共必ずしも總ての線を見える様にする必要はない。何となればもしフィンガーボードを見る必要がある時はG線に於てフレットの位置を見定めたならば他の總ての線のフレットを見るのと同じ事になると同時に如何なる場合に於ても指の位置が如何なる場所に行つて居るかは敢て之を見定める必要のない位明瞭に分つてゐるからである——殊に低いポジションに於て然りである。若し楽器をしつかり把持しやうと思ふならばなる丈右の方へ抱へなければならぬ。かくすれば把持が確實である計りでなく、兩手は前方で眞直になるを得て同時に少しも自由を束縛せられない。

次に重要な事項は右腕と手首との位置である。そして彈奏の容易と自由とが望まれる時は最も重要な事項であると私は考へる。こう云ふ事は自然に注意する様になるものであると云ふ事を口にする教師及演奏者が案外多い。しかし私は其意見に賛成する事は出来ない。何となれば此事はマンドリンを學ぶ始めに於て充分なる注意と練習とを要するからである。でももしマンドリンが充分右の腕に抱へられ楽器のネックとボディのつなぎ目が丁度中央に来る様にしたらならば右腕を正しき位置に置く事が一層容易になるであらう。何となれば、實際、マンドリンを抱へる正確な方法は唯一つしかないので、其唯一の方法は右腕を完全に自由にどつちへも動かす事が出来る様に柔かにもたげ同時に手首も錘の様に垂れ得る事を要する場合——かかる場合には楽器は出来る丈右の方に抱えなければならぬ——に、手首が占めてゐなければならぬ位置に於て手首を曲げて居る事に外ならないのである。勿論私は多くの教師及び演奏者が手首を眞直にする事が最よいと堅く信じてゐる事も又はつきりとは信じて居なくてもこふ云ふ風に教えられて居り、此方法を變更する爲に

少しの努力をも費さなかつた事を充分知つてゐる。然し此事實と雖も私の考の正しい事を斷言する事を妨げない。私は手首を保つ自然なそしてそれ故に最容易な方法は例令ば椅子の背中に手をもたせて休めて居る時に自然に取る格好即ち手首を曲げてゐる事である事を確信し且つ證明するのを喜ぶ。

始めに掲げた表題の下に手首の位置の論議をするのは見當違ひの様に見へるかも知れない。けれ共此問題は事實表題と最大なる關係があると云つてよろしい。何故ならば學習の始めから總ての筋肉が樂な束縛のない状態に置かれなければ完全なしつかりしたテクニクを得る事は望み得られないからである。

手首を極端に高くもたげる事は必要もなく、又贅成す可き事でもない。それは手首を眞直にしてゐると同様に窮屈であり、又適當でない。總ての秘訣は上述した様にマンドリンを持つ事である。即ち右の前腕を樂器の上縁に、テールピースに——直接に觸れぬ範圍に於て——密接して置く事である。マンドリンと腕との接觸點は腕

の長さに依つて必ず多少の相違があるが通常、手首の關節と肘との中央の邊である。

かくして腕が安易に中樞點に置かれ、肘が甚だ樂に置かれ且つピックが絃の上部落されたならば全體の位置は大體正しいものとなる。普通の場合に在つてはピックはフィンガー、ボードの端とブリツヂとの中央の邊で絃を打つ事になる、即ち一般に云へばサウンド、ホールの下の方の邊で打つ事になるのである。此位置にピックを持つて來る事は腕と樂器との接觸點を少しく變更するか或は手首の位置を極めて僅か上げるか下げる事になる。けれ共腕、手首及手は完全に安樂に、自由に感じる様にしてゐなければならぬ。

右に述べられた様な位置にマンドリンを持つ時は、少くとも、肘を上げ不自然な、不愉快なまでに右の肩を下げないでは手首を眞直にする事が全然不可能である事を直に發見するであらう。樂器の頭を垂直にする事に附け加えて注意しなければなら

ない事はベツクの端——之を他の方法で云へば——左の手はボデーより數吋高く保たれなければいけない。卽絃が兩膝を結び附ける線と二十五度の角度を作る様にしなければいけない。

腕と手首が自然な位置を取つた以上はピックに就いて考へなければならぬ。ピックの形と材料とはテクニツクの論議には大なる關係を有してはゐないが、音樂上の立場から見るとは甚だ重要な問題となる。此點に關しては私は自分の實驗及觀察の結果を述べる事が出来る丈である。其結果に従へばピックは一寸位の長さで卵形を可とする。材料は貝殻と他の合成物との二種ある中私は後者を選ぶ。厚さは中庸の物が最もよろしい。何となれば餘りに薄いものはカサ／＼云ふ不愉快な音を出すのみならず、音調が弱く、餘り厚いものは和かな音を出す事が困難で、且つ扱ひにくいからである。

ピックを如何に持ち、如何に扱ふ可きかは、シアイオリンを奏するに當り弓を如何に使用し、操縦す可きかと同様非常に重要な問題である。私は私が本文中に述ぶる所の注意から得る所あらんとする人は、假令面倒な事があつても總ての指圖を正直に守るものと考へて本文を書いてゐる。もしさうでなくて、徒に漫然と讀む人があれば其人は決して多くの收穫を得る事は出来ない。例へば前に述べた樂器の位置及び右手に關する注意の如きは何れも甚重要なもので、もし良い效果を得やうとするならば嚴重に之を守らねばならぬ。で、ピックを持つに當つては先づ人差指をJ字形に曲げ、指の側面第一關節より少し指先に寄つた所にピックを乗せ指の腹が人差指の尖と第一關節との間で、ピックの上へ平く乗る様に親指を持つて來るのである。此場合に親指關節を眞直平にする事が甚必要である。何となれば若し少しでも關節を曲げる時はピックが動いて絃を平に打つ事が不可能になるからである。

ピックを持つに要しない三本の指は全くゆるやかにして、其先が人差指の先と一直線を成す様に揃えてゐねばならない。掌の内へ折り込み又は人差指へくつつけて

しまふのはよろしくない。何故ならば人差指は他の指から何等の助けを借る必要がないからである。又ピックを持つ時には、其尖端が絃に當る様にするよりも、尖端より少し内へ曲つた所を絃に當る様に持つ方がよろしい。

次は絃の打ち方であるが、これは先づ手とピックとを上げる事によつて始められる。こんな事を云ふのは無用の業の様であるが然し物を落す前に之を上にあげることとは必要缺く可らざる事で又絃を打つと云ふ事は實際「打つ」と云ふ事に基いてるので、ピックで穩に押す丈の事ではない。絃を打つと云ふ事の原理少くともその根本原理は鐵槌で釘を打ち込むのと同様である。即ち鐵槌の重さと之を振り上げた距離とは釘を板に打ち込むに必要な力を決定するものである。で、下に向けて打つ事に對する準備として前膊の樂器の側に觸れてゐる部分を軸として手は上へ持ち上げられる。此場合に手は出来る限り便宜の方法で上へ上げられ手首は自然的に曲線又はアーチを作り（樂器が適當な方法で持たれる時に手首が自ら此形を取る事は前

に云つた通りである）其結果としてピックは絃から一寸半乃至二寸の距離に在る様になる。斯くの如く右手を使用する際に注意せねばならぬ事は手首は決して動す——換言すれば位置を變ずる——可らずと云ふ事である。即ち運動は樂器の側に置かれた腕を軸として「手」によつて爲さる可きものであつて手首は其位置を動かす可きではない。我々が屢々手首の運動と云ふ事を口にしますが實際は手の運動を意味するのであつて、マンドリンを奏するに當つて手首の爲す所は曲げられた形を取つて手の運動の土臺と成つてゐる事なのである。

手が持ち上げられたとして次に來る可き動作は手を落す事である。即ち手の重みの上に僅少の力を加へて手を落す事である。若し手が適當に上へ持ち上げらるゝ時はピックは最も高い位置に來た時に絃の上方一時の所に來るであらう。此場合にピックは、アップ、ストローク（掬ふ事）が次の低音絃に觸れない様に、又ダウン、ストローク（打つ事）が次の高音絃に當らぬ前に止る様な角度で持つてゐる様に氣を



つけねばならない。けれ共ピックを斯かる角度で持つ時は「掬ふ」場合に一對の絃の両方を掬ふ事が出来ない」と云ふ反對者が出て来るだらう。然し此反對は重大なものではない。何となればアップ、ストロークで一對の絃を掬ふ事は至要の事ではなく、若し一對の絃が調子さへ合つて居れば一方を打つ時は他の一本に共鳴する。又如何なる場合に於ても、力學上の立場より見る時は一般にアップ、ストロークはダウン、ストロークに比して重要な結果を齎らさない。何となればアクセントなるものは常にダウン、ストロークに由つて附けらる可きものであるから、或人はダウン、ストロークとアップ、ストロークとは、ヴァイオリンに於けると同等の價值を持つてゐると云ふけれ共弓を上げる場合と下げる場合とは同じ價值を持つてゐると云ひ得る場合があるとしても、而も實際ヴァイオリニストは弓を下げる時にアクセントを付け又下げる弓でもつて樂節を始めるのを普通とする事を注意して置きたい。然し如何してもダウン、ストロークの場合に於けると同様にアップ、ストロ

クに於ても一對の絃の両方を打たねばならぬ必要があるとすれば之に對して私の云ふ可き事はピックを出來得る限り緩く持つならば最よい結果が得られ大抵の場合には其目的を達する事が出來ると云ふ事である、かゝる些細な事は迅速なテクニクには無關係の様に見えるかもしれないが、實際に於ては大なる關係を有してゐる。